

産業経済委員会行政視察報告書

以下のとおり視察の報告をいたします。

1 委員会名及び視察者名

産業経済委員会：委員長、竹之下一美 副委員長、上坂月夫
委員、永山透・大浦さとる・榎木智幸・蔵屋保・児玉優一

2 視察先・テーマ及び日時

- 平成 29 年 7 月 4 日（火）14：30～16：00
岡山県岡山市：若手農業者モデル経営体登録事業について
- 平成 29 年 7 月 5 日（水）14：00～15：30
山口県周南市：進化する道の駅ソレーネ周南の運営について
- 平成 29 年 7 月 6 日（木）9：30～11：00
山口県下関市：シビエ有効活用推進事業について

3 視察の内容

1.若手農業者モデル経営体登録事業について

- (1) 「モデル経営体の登録要件」の具体的な基準について
- (2) 若手農業者モデル経営体登録事業者及び新規就農者への支援について
 - ・農機具、加工施設及び直売所開設等への支援について
- (3) 若手農業者モデル経営体登録事業の効果及び今後の課題について
- (4) その他の関連事項
 - ・農業後継者、担い手農家への支援について
 - ・六次産業との関連（県、市等からの補助等）について
 - ・農地等の放棄地対策について
 - ・市民農園について

調査の予定でしたが、台風 3 号の影響で公共交通機関に乱れが生じ、岡山駅への到着が大幅に遅れました。

担当より岡山市へ連絡したところ、台風による大雨で担当課が対応できないという事でした。

全員で協議し、委員長竹之下、副委員長上坂、担当宮元の 3 名で岡山市役所へお伺いし、議会事務局課長山本和広氏、係長猿渡伸一氏、統括審議官矢木広幸氏と面談。今回の調査についての資料をいただきました。

参加委員全員資料を精査し、今後の市政に反映することを委員会として確認し

ました。

2. 進化する道の駅ソレーネ周南の運営について

- (1) 周南ツーリズム協議会の概要について
- (2) 独自の24時間「集荷販売体制」の実施要領について
- (3) 高齢者、交通弱者への集荷を通じた「安否確認」「買い物支援」の具体的な内容について
- (4) 六次産業との関連（県、市等からの補助等）について
- (5) 集荷、販売体制及び24時間営業等の課題について

3. ジビエ有効活用推進事業について

- (1) 「みのりの丘ジビエセンター」の概要と事業費につて
- (2) 指定管理者の自主企画事業（ジビエ買取等）について
- (3) 解体処理及び販売実績について
- (4) 六次産業化との関連（県、市等からの補助等）について
- (5) ジビエ有効活用推進事業の課題等について
- (6) ジビエ有効活用施設の設置等に関する条例について

4 視察感想等（別紙添付）

産業経済委員会行政視察報告書（感想等）

委員名 竹之下 一美

1 視察の感想

前年度同様、本年度も台風の影響を受けた行政視察となってしまいました。

周南市では、周南市議会事務局次長の末永氏より歓迎のあいさつの後担当より道の駅ソレーネ(そうだね)周南の説明を受けました。

山口県には 239 道の駅があり 21 番目にオープン。

平成 26 年 5 月 17 日（土）地域振興を含む「道の駅」としてオープン供用開始。

総事業費 19 億円（国 6 億円、市 13 億円）。

道の駅を活用した高齢化地域支援+雇用創出。

集荷・宅配移動販売を 1 台の車でやっている。

社会福祉協議会運営の包括支援センターも設置されている。

コンビニコーナーを取り入れ、24 時間営業が行われておりコンパクトでいいアイデアだと思った。

それによって、売り上げ、来客数ともに当初予測の 1.4 倍となった。

平成 29 年 3 月 31 日現在で年間売り上げ 6 億円、1 日売り上げ 164 万円、年間買い物客数 74 万人、1 日買い物客 2 千人で利益も出ているとの説明であった。

委員からの質問も多く出され、その後、現場（店内）の案内を受け実りある研修であった。

最終日の下関市では、議会事務局局長田邨昇氏より歓迎のあいさつの後、有害鳥獣対策室長高田潤一郎氏よりジビエ有効活用促進事業について説明を受けました。

都城市と同様で高齢化が進み農家戸数の減少、耕作放棄地の増、また冬が暖かいと、いのしし、シカ、サル等が増えるとの事であった。

被害防止対策として侵入防止柵設置事業-捕獲檻 8 万円、防護柵 157,500 円。

有害鳥獣保護奨励事業-いのしし 5 千円、シカ 1 万円、サル 2 万 6 千円で効果として 19~28 年の 10 年間でいのしし 11,269 頭、シカ 11,798 頭、サル 451 頭、計 23,508 頭。

みのりの丘ジビエセンター設立。

総事業費 56,148 千円で、年間のいのしし 310 頭、シカ 290 頭 計 600 頭処理されております。

センター持ち込みまで 1 時間以内が原則。

肉の歩留まりは 3 割。

販路の確保のため 230 店舗でアンケートを調査実施。

ジビエ販売に関する関心有は 1/4 の結果でした。

また、いのしし、シカの加工品、いのししチャーシュー・いのししソーセージ、イノシシハム、いのししベーコン、いのしし丼、いのしし肉団子、シカ竜田揚げ、シカハム、シカソーセージ、シカハンバーグ、シカカレーが開発されている。

採算的には厳しいとの事でした。

基本的には自分で解体すること（利用料発生）。

ジビエの有効活用の課題は、いのししの導入が少ない。

シカは歩留まりが悪い。

導入のバランス。

基本的には農業被害の防止が目的。

サルの捕獲難しい～対策（サル）必要。

猟友会の減少をどう止めるか。

山間地の多い地域・都城も同じで今後の課題だと思った。

2 視察の成果及び市政への反映等

道の駅ソレーネでは、休憩施設等への一時退出を可能とする「賢い料金」として、ETC2.0 搭載車を対象とした高速道路外の休憩施設等への一時退出を可能とする実験の実施を活用。

高速道路本線から道の駅等での休憩 1 時間位でも料金はそのままという事で、ソレーネ周南の駐車場では駐車台数 170 台の内、大型車用 42 台のスペースがほとんど満車の状態であった。

都城市の道の駅でも今後検討すべきと考えた。

ジビエの活用では、商品開発は必要であり取り組むべきである。

また、有害鳥獣対策では新捕獲機で 1 度に 50 頭のサルが捕獲されたとの事でしたので、新捕獲機の研究を進めるべく検討が必要。

また、販路確保のため、ジビエ料理試食等の開催についても、都城市でも今後の研究課題と感じた。

今回の行政視察を今後の市政へ反映すべく努力してまいります。

産業経済委員会 視察報告書(感想)

委員名 上坂月夫

1 視察の感想

(1) 岡山市役所：「若手農業者モデル経営体登録事業について」

・悪天候（大雨）等の交通事情により視察できず。 資料のみ受領した。

(2) 周南市：「進化する道の駅ソレーネ周南の運営について」

周南ツーリズム協議会の概要、独自の24時間「集荷・販売体制」の実施要領、高齢者・交通弱者等への集荷を通じた「安否確認」「買い物支援」の具体的な要領六次産業化との関連、24時間体制の課題を主な調査事項として視察を実施した。

「ソレーネ周南」は、「オール周南で24時間周南ブランド発信」をコンセプトに施設を運営する一般社団法人「周南ツーリズム協議会」が独自の集荷体制と販売体制を構築し、市内全域から集まった野菜等の農作物や魚介類を24時間販売している。又、販売される農林水産物は、納入も24時間行っており、水産物は漁の帰りに納入するなど、昼夜問わず鮮度の高いものが店頭に並ぶようになっている。

場所的にも、真夜中でも交通量の多い国道2号線沿いの立地条件を活用している。商品を「出せる人・持ってこれる人」だけが直売所への出荷対象者ではなく、高齢化が進む小規模農家、交通弱者への出荷ができる施設体制であった。更に集荷体制で、安否確認・買い物弱者等への中山間地域の課題にも対応しており、都城市の共通課題への施策の参考となると痛感した。

(3) 下関市役所：「ジビエ有効活用推進事業について」

「みのりの丘ジビエセンター」の概要、指定管理者の自主企画事業、解体処理及び販売実績、ジビエ有効活用推進事業の課題、施設の設置等に関する条例についてを主な調査事項として視察を実施した。

下関市の「ジビエ有効活用推進事業」については、平成21年度から取り組み、山口大学農学部による「E型肝炎ウイルス感染調査」、意見交換会を猟友会・JA・食品加工業者・保健所・市建築住宅課・有害鳥獣対策室等での実施、先進地の視察等を経て、基本計画の策定、建設予定地地元説明会の開催・同意取得、猪等の処理衛生管理ガイドラインの策定、ジビエPR・加工品アンケート調査及び販路調査施設実施計画、指定管理者選定等、段階的な計画の基に供用開始している。

「みのりの丘ジビエセンター」の総事業費は56,148,000円であり、国費が27,229,000円、市費が28,919,000円の内訳である。

年間計画処理頭数は、600頭（猪：310頭・鹿：290頭）である。

猪・鹿肉の加工品は全12品で、みのりの丘の売店、道の駅等で平成25年5月から販売されている。

政府も来年度に全国で12のモデル地区を公募により指定して、ジビエの利用拡大に向けた支援を始める。有害鳥獣を駆除して、食肉利用で所得向上にも役立つ一石二鳥の切り札としての、国の方針であるが課題も多いと思う。

都城市も年間約1,890万円の鳥獣被害があり、被害対策、駆除した猪や鹿等の有効活用等の早急な対策が必要である。

2 視察の成果及び市政への反映事項

(1) 成 果

ア 周南市：「進化する道の駅ソレーネ周南の運営について」

- (ア) 高齢者・交通弱者にも「道の駅・直売所等」に係わる事で農業振興、生き甲斐対策に繋げている。
- (イ) 集荷を通じて安否確認や生活に必要な商品を届け、買い物弱者支援を行い、中山間地域対策にも「道の駅」が機能している。
- (ウ) 交通量の多い国道沿い・高速道路 I C 近く等の立地条件を最大限活用している。

イ 下関市：「ジビエ有効活用推進事業について」

- (ア) 約 5 年計画のジビエ有効活用推進事業の取り組み段階「ウイルス感染調査から供用開始まで」の思考過程等の把握。
- (イ) 「みのりの丘ジビエセンター」の概要「搬入から出荷まで」、事業内容の把握。
- (ウ) 野生鳥獣にいる細菌や寄生虫の感染拡大を防ぐ適切な衛生管理。

(2) 市政への反映事項等

ア 周南市：「進化する道の駅ソレーネ周南の運営について」

- (ア) 中山間地域の高齢農家・交通弱者への集荷・販売体制。
- (イ) 集荷・移動販売体制を活用した高齢者・一人暮らしの安否確認。
- (ウ) 「道の駅」内に、情報発信コーナー・隣接施設への防災機能の設置。
- (エ) 夜中でも交通量の多い国道沿い、高速道路 I C に近い立地条件の活用施策。

イ 下関市：「ジビエ有効活用推進事業について」

- (ア) 都城市の有害鳥獣を駆除した後の処分状況の細部把握の実施。
- (イ) 政府のジビエ利用拡大施策「捕獲・搬送・処理加工・保冷施設で在庫調整・ジビエレストランマップの作成等」、細部の政府方針の把握。
- (ウ) 政府の「ジビエ消費倍増」への指針に伴い、来年度「全国 1 2 モデル地区を公募指定」への公募。

H29・7・10(月)

産業経済委員会行政視察報告書

児玉 優一

* 山口県周南市…進化する道の駅ソレーネ周南の運営について。

1. 視察の感想

女性や高齢者のドライバー増加や人々の価値観の多様化により、個性的でおもしろい休憩施設での多様で個性豊かなサービスの提供が求められています。

さらに、これらの休憩施設により地域の核が形成され、活力ある地域づくりや道を介した地域連携が促進されるなどの効果も期待されます。

こうしたことを背景として、道路利用者のための「休憩機能」、道路利用者や地域の方々のための「情報発信機能」、そして町と町とが手を結び活力ある地域づくりを共に行うための「地域連携機能」、の3つの機能を併せ持つ休憩施設「道の駅」が誕生しました。

今回視察で訪れた「道の駅 ソレーネ周南」もこのコンセプトのもとに平成26年5月17日にオープンし、指定管理者制度で運営されております。

この施設の特徴はコンビニコーナーや農林水産物直売コーナー等があり24時間営業をしておられます。また、高齢者の相談などに対応出来る情報発信コーナーも設置されています。あわせて、高齢の生産者や買い物弱者等に対応できるよう集荷、宅配、移動販売等のサービスも行っています。このサービスや24時間営業は高齢化が進むなかで高齢者が安心して生活出来る環境づくりの一翼を担っているように感じました。

2. 視察の成果及び市政への反映

道の駅の周辺状況によっては24時間営業が地域の安心・安全に寄与することも期待出来ますが、従業員の確保を含め収支面がどうしても課題となってきます。また、高齢の生産者への集荷や、買い物弱者への宅配、移動販売も効率よく行われており素晴らしい取組だと感じました。

ただ、都城市ではすでに移動販売車による買い物弱者支援に取り組んでいるので、今後は24時間営業や集荷事業が可能なのかを検討してみる必要もあるのではないかと感じました。

* 下関市…ジビエ有効活用推進事業について。

1. 視察の感想

近年、イノシシ、シカ、サルなどの野生鳥獣による農作物や住民への被害が全国的に広がりを見せて、中山間地を中心に深刻な問題となっています。全国での被害額は年間100億円を超えている状況にあります。

その対策としては、大きく分けて二つの方法で取り組んでおり、ひとつは電気柵やフェンスなどを設置し農地への侵入を防止する方法と、銃器・わなで捕獲するという方法です。この際捕獲した有害獣は捕獲者が食用として自家消費するか、運搬が困難な場合は埋設しているのが現状です。

下関市でも年間1億5000万円程度の被害が出ており、猟友会の協力を得て毎年2,500頭程度のイノシシやシカを捕獲しております。

しかしながら、その肉は特に活用されることもなく、また捕獲者の高齢化により埋設等の処理は大きな負担となっていました。

これらの問題を解決するとともに、ジビエとして有効活用することを目的に「みのりの丘 ジビエセンター」が建設されました。

この施設は持ち込まれた有害獣を解体し、指定管理者が適切な価格で買い取ることで、多方面での効果が期待されています。

ただ、衛生基準を厳しく定めており、射殺後1時間以内でないと搬入が出来ないことや、イノシシとシカの搬入数に大きな偏りがあって需要と供給のバランスが取れないなどの問題も抱えておられるようです。

それでも貴重な食材を有効活用でき、また捕獲者の収入が増えることにより、捕獲意欲の向上や、狩猟免許の取得の増加も期待できるので、非常に有効な事業だと感じました。

2. 視察の成果及び市政への反映

都城市でも年間にイノシシで約1,500頭、シカで約1,000頭を捕獲しているにもかかわらず、自家消費だけで終わっているのは非常にもったいない状況だと思います。平成27年6月現在で野生鳥獣を地域資源として活用している事例では全国では172件、九州管内で40件、県内で4件となっています。また、加工処理施設整備にたいして、国の交付金事業で2分の1の補助が活用出来ます。私は平成28年12月議会でこの問題を質問しており、部長も先進事例を参考に調査・研究をしていくと答弁しておりますので、早期に調査委員会等の設置を望んでいます。

産業経済委員会行政視察報告書

榎木 智幸

1、視察の感想

＊周南市（進化する道の駅ソレーネ周南の運営について）

「ソレーネ」とは地元の方言で「そうだね」という意味だそうだ。国交省と周南市が一体となって取り組んだ道の駅であり、駐車場 170 台、トイレも 33 器と充実しており、この施設だけで広さと大きさを感じた。道の駅本体の総工事費は 19 億円で、合併特別債を充当していた。屋根は地元の鶴をかたどっているとのことで、各イベントでは役に立っているようだった。店舗経営で特徴的と感じたのが、24 時間営業のコンビニになっていたこと、人的配置に苦慮しながらもお客様のニーズに応じていると自負しておられた。特に売れ行きがいいのが地取れ野菜と鮮魚コーナーとのことで、特産品なども多く展示していた。これだけの施設だが、食堂がなかったのには物足りなさを感じた。防災機能も有しており、多くのドライバーを救済できる整備がなされていた。周南市から一般社団法人「周南ツーリズム協議会」が指定管理料 1400 万円の運営費を受け、あとの経営は独立採算制となっており 5 年間の指定期間となっていた。高齢化と中山間地ということもあり、集荷と宅配・移動販売を生産者・職員・ヤマト運輸と連携して高齢化地域支援と雇用創出を行っていて感心した。最後に、国交省の取り組みで高速道路利用において、ETC2.0 搭載車を対象に高速道路外の休憩施設への一時退出ができ、高速を降りずに利用した料金のまま道の駅等の利用ができるよう実験が行われるとのことだった。

（視察の成果）

道の駅がイベント会場として多くの市民に利用されていることは、本市でも今後さらに推進していくべきと感じた。また、ヤマト運輸などと共同で、中山間地域の買い物弱者対策や地域づくりに役立っていることも、道の駅ならではの感じた。わが市では、道の駅や温泉施設など公共施設も食糧品販売などを手掛けているが、高齢化が進む中、地域と一体となった取り組みを期待したい。



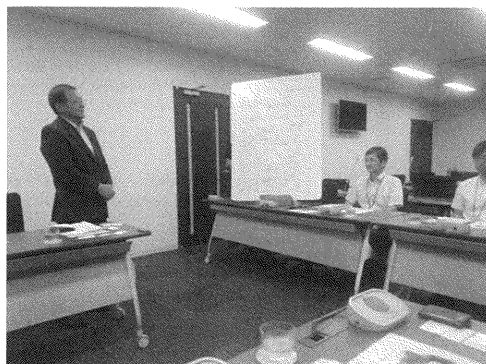
2、視察の感想

* 下関市（ジビエ有効活用推進事業について）

下関市の野生獣による被害額は平成 28 年、鹿の 7692 万 6 千円が最も多く、次にイノシシ、猿となっており、造林木や稲の被害が多く見られるとのことだった。被害防止対策として侵入防止柵設置事業・有害鳥獣捕獲奨励事業を行っており、捕獲ではイノシシ一頭 5000 円、鹿 10000 円、猿 26000 円、捕獲檻一基 80000 円、捕獲柵一基 157500 円となっていた。捕獲実績は、28 年度イノシシ 1140 頭、鹿 1316 頭、猿 120 匹と年を追うごとに増えてきていた。農作物被害が深刻となり中山間地域の人口減少と活力の低下で増え続ける野生獣、こうした実情を踏まえ下関市では「みのりの丘ジビエセンター」を設立した。捕獲においては、隣接する長門市と連携していた。平成 21 年度から E 型肝炎ウイルス感染調査・意見交換会・先進地視察を行い、基本計画策定し地元説明会の開催、その後、保健所の指導の下イノシシ等の処理衛生管理ガイドラインを策定、その後ジビエ P R ・加工品試作アンケート調査・販路調査など行い、その後施設の建設に取り掛かった。センターの供用開始は平成 25 年 4 月、総事業費 5614 万 8 千円となった。処理頭数は 27 年度イノシシ 122 頭、鹿 531 頭となった、イノシシは狩人たちが自家消費する為少なくなっているとのことだった。イノシシ・鹿肉加工品は、全 12 品となっており、平成 25 年 5 月からみのりの丘売店・道の駅で販売を開始している。

（視察の成果）

都城市も鳥獣害は毎年のように増えてきており、捕獲する猟友会の高齢化も進んでいる下関市と同じく、中山間地の人口減少による活力の低下が野生獣の増大につながっており、さらに被害が大きくなることが予測される。されど今回の視察で厳しく感じたのは死んでから一時間以内の肉のみが販売対象となることを伺い、本市での取り組みの難しさを感じた。ただ猿の捕獲では大きな成果をあげておられ、本市での猿捕獲対策に大いに役立つのではないかと感じた。捕獲用の檻で東京のトバリという企業が 150 万円で販売しており、下関では一度に 50 匹捕獲した実績が報告された。この取り組みは本市でも必ず行ってほしいと強く感じた。



平成29年産業経済委員会研修報告書

委員名 永山 透

山口県周南市「進化する道の駅ソレーネ周南の運営について」

1、 視察の感想

道の駅ソレーネは国土交通省と周南市が一体となって整備し、平成26年5月オープン、供用開始したものである。主な施設は駐車場170台（大型車42台、普通車125台、身障者用3台）・トイレ33器・物販販売施設、製造販売施設、軽食コーナー、食堂、情報発信コーナーを備えた施設である。事業費は19億円（国6億円、市13億円）となっており合併特例債を利用している。店内にはコンビニコーナーを設けており、24時間営業をしている。

特筆されることは災害対応の土嚢倉庫、かまど式ベンチ、井戸を設けており、EV対応の施設も完備していることである。

道の駅を活用して高齢化地域支援を行いながら雇用の創出に寄与しており、買い物弱者には宅配、移動販売も行っており、中山間地の高齢者には喜ばれている。移動販売車は3社に委託しており、周南市の島でも販売しており喜ばれている。「ソレーネ周南」の売り上げ・来客は当初予測の1.4倍の6億円・74万人と増加傾向となっている。

2、 視察の成果及び市政への反映

「道の駅ソレーネ周南」の面積は22,900m²、国道2号線に面しており、インターチェンジから300mと最適な位置にある。又、高速より一時退出して「ソレーネ周南」で休憩・買い物をして時間内に帰ると、高速を降りずに利用した料金のままで移動することが可能となっている。成果は移動販売における道の駅の取り組みが、中山間地域の高齢農家、買い物弱者を支えており、集荷・宅配を通じて見守りにもつながっていることを強く感じた。当市の「道の駅都城」は形態が違うので応用は難しいと思われる。但し、移動販売車の充実が高齢化が進む地域が多くなり、きめ細かいルート等の選定が必要である。

平成29年産業経済委員会研修報告書

委員名 永山 透

山口県下関市「ジビエ有効活用推進事業について」

1、 視察の感想

下関市は平成17年1市4町が合併して面積715km²の新下関市が誕生した。北部の4町は中山間地で面積の68%を占めているが人口は全体の15%となっている。4町においては山林が多いため鳥獣被害が多く発生しており、特にシカ・猿・猪が顕著で被害額は増加傾向となっている。被害防止対策として侵入防止柵設置事業や捕獲奨励事業を実施している。その結果、猪は1,100頭、シカ1,170頭、猿50頭の捕獲実績である。特に猿の捕獲は平成28年度に大型の捕獲柵を設置して50頭から120頭へと捕獲頭数が増加している。

捕獲した有害鳥獣の有効活用として平成25年4月「みのりの丘ジビエセンター」を設立して、捕獲処理機能・加工販売機能・地域ぐるみの有害獣被害軽減対策機能を備えたジビエセンターを北部（豊北、豊田、菊川）の中山間地に設置したものである。今後は都市近郊にも予定をしているとのことである。対象獣としては猪、シカの2種類である。

猪、シカは処理衛生管理の規定がないために、下関保健所の協力により作成して処理している。販路の確保が重要であり、市内飲食店、食肉販売店にアンケートを実施するとともに、ジビエ料理の試食会（猪、シカ）を行いソーセージ・ベーコン・肉団子・ハム・猪丼・シカカレー等が好評であった。

現在、ジビエセンターでの年間処理頭数は猪310頭、シカ290頭の計画であり、おおむね計画通りの処理を行っている。

2、 視察の成果及び市政への反映

合併時の状況は都城市と相似している。4町は中山間地であり、有害鳥獣被害が多発して、日常生活にも危機感があり被害防止対策と捕獲奨励事業を行った結果、捕獲した有害鳥獣の有効活用を行うためにジビエ事業を行うことにしたものである。都城市に反映できるかは今後の捕獲頭数等を検証して順次提案していくべきだと感じた。

産業経済委員会行政視察報告書

委員名 蔵 屋 保

1 視察の感想

周南市道の駅「ソレーネ周南」について、

「ソレーネ周南」は周南市の中心部より車で約20分の国道2号線、山陽自動車道徳山西IC近くに立地し、交通面での周南市の玄関口に駐車場とトイレを国が、建物本体を周南市が整備し運営がなされている。

指定管理者には一般社団法人「周南ツーリズム協議会」があたり、協議会は農林水産振興を担う周南農業協同組合他3つの組合、地域経済活性化を担う徳山商工会議所他4つの商工会や商工会議所、観光振興を担う周南観光コンベンション協会他1つの団体の計11の団体で組織され、休憩機能と情報発信機能、市民の交流促進の機能も併せ持つ他の道の駅では余り見かけない機能を持った施設であった。

農産物の販売では高齢農家地域支援と雇用の創出に取り組み、買い物弱者等の宅配や移動販売車などの取り組みを行っている。研修交流室は地域の公民館の役割も果たしながら、地域防災機能も備えていた。

場所の選定から、機能や運営に至る総合的な施設計画が綿密になされ、具現化するまでのプロセスには行政を中心に各団体の意見を十分に取り入れた事が随所に見られ、さらに進化している事には、運営団体の努力と共に地域の人々の協力と思い入れが感じ取れる。

ジビエ有効活用推進事業について（下関市）

下関市に於いても野生獣の被害は年々増加の一途をたどり、近年は特に鹿によ

る被害が多くなっている。被害の深刻化は中山間地域の営農活力の減退を招き人口減少にも繋がっている。そこで、捕獲したイノシシと鹿をジビエとして有効活用することで、有害獣被害の軽減が図られることを目的に「みのりの丘ジビエセンター」を設立した。センターでは捕獲処理機能と加工販売機能を備えイノシシや鹿の野生獣についてはと畜法の規定がないことで、下関独自の基準を作成し、年間600頭の処理を現在おこなっている。加工品は全12品目で、みのりの丘売店、道の駅西の市、道の駅豊北で販売し、さらに市内の飲食店へ販路を開拓している。

有害獣を捕獲するだけから、ジビエとして商品化されることが地域活性化にもなり、更に高い栄養価や調理の方法を独自に考案し売り出す事で食品業界の新たな経営戦略になる可能性を十分に感じ取れる。

2 視察の成果及び市政への反映等

周南市道の駅「ソレーネ周南」については、当初計画の段階から、農林漁業、地域経済、観光、地域福祉、地域防災等の情報発信の中心としての役割を総合的に担う施設として取り組みがなされ連携をより図って行く上で、指定管理者としてそれぞれの中心的な役割を果たして来た団体が一つになり、企画運営をしている。しかし、いくら綿密に計画がなされ実現ができて、理想とする実情に対応出来ていない部分があることはある意味想像はできて仕方のない事でもあるが、参加する人や団体が理想に向かって施設を進化させていく考えはこの種の施設では今迄に無かったと思う。

「進化する道の駅」のフレーズの意味を教えて頂いた。本市の施設でこのような広範囲の機能を果たす物は見当たらないが、これからの少子高齢化、人口減少社会に於いては、この様な考えを取り入れることにより老朽施設の機能の集

約化などで、財政負担の軽減化を図って行くことの考えのヒントにもなったと思う。

また、機能の集約だけでなく、将来の時代の変化に対応できる施設として、行政はもとより、地域住民や団体を巻き込んだ運営管理を目指す施設である事が必要であり、施設の進化にも繋がるものと考えている。

下関市ジビエ有効活用推進事業については、野生獣被害の対象を森からの恵みに変えた、いわゆるピンチをチャンスに変えた発想であり、本市の野生獣被害対策にも有効であると思う。中山間地での地域活性化に悩む起爆剤として他になかなか有効策の無い現状に、行政を中心に関係各団体や地域住民と一緒に取り組む事は大変有意義であり、魅力ある地域に変わっていくかも知れない。

捕獲から解体処理、商品までは専門知識者や業者の努力で比較的スムーズに解決できる部分ではあるが、流通に乗せて行く事は季節的な需給のバランスや消費者のニーズにどれだけ応えられるかなど簡単には解決できない部分がある。

色々な課題をクリアすることは、今本市が取り組む6次産業化の問題解決にも通じるものであると思うが、特に最後の流通の部分が確保される仕組みについて、作れば必ず売れる商品開発の取り組みの重要性について、お互いに学び努力する事が課題の解決糸口になると思う。

産業経済委員会行政視察報告書（感想等）

報告者 大浦 さとる

視察先 山口県周南市

1. 視察感想

「進化する道の駅ソレーネ周南の運営について」視察感想

道の駅ソレーネ（そうだねの意味）周南は国道 2 号線沿いにある周南市の道の駅で、県内で 21 駅目に出来たとのこと。この道の駅は国土交通省山口河川国道事務所と市が一体となって整備されたもので最初は国土交通省が平成 26 年 4 月に整備した駐車場とトイレについて利用開始、つづいて同年 5 月中頃に道の駅がオープンしたものである。道路情報、休憩所、トイレ、コンビニエンスストアも入っており山口県や地元の周南市の農産物の直売や海の幸も販売している。地産地消のレストランがあり、テナントも多く入っている。駐車場も広く 170 台（大型車 42 台、小型車 125 台、身障者 3 台）となっている、平成 29 年 4 月よりバス停を設け供用開始している。道の駅の形状はツルが羽を広げた形となっており、屋根付き広場や芝生公園もあり、夏などは親水護岸を利用して子供達からも喜ばれている。また、防災機能を備えた施設（土のう置き場、井戸、ベンチ式かまど）あり、また道の駅の反対側に研修交流室も設置してある。単なる道の駅ではなく、ここが目的地にもなりえる総合施設となっている。

指定管理（11 団体）一般社団法人周南ツーリズム協議会での運営で 24 時間開放されている。高齢化地域支援としても活用され、中山間地の高齢農家、買い物弱者と連携し、農業生産者やソレーネ職員、ヤマト運輸を使い農産物の集荷や宅配、移動販売を実施している。売上・来客数の当初予測の約 1.4 倍の伸びとなっている。

今年 7 月 15 日から新たな取組みとして、ETC 利用の高速道からの一時退出を可能とする「賢い料金」高速道路以外の休憩施設へ一時退出でき休憩施設等の不足解消のためのもので、高速道に帰っていけるようなシステムとなっている。

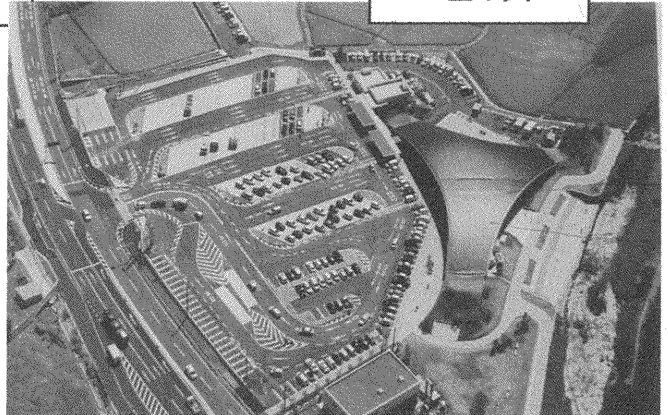
2. 視察の成果及び市政への反映等

一般的な道の駅ではなく、24時間対応できることはいいことだと思える。また、福祉的な考えで、高齢者の見守りなどを兼ね備え、農産物を集荷してもらうなど、何時でも商品を持ち込むことも出来る。レストランも広く地元食材を利用することにより地産地消も一役買っている、誰でもが利用しやすくなっているように思えた。また避難所としての活用も出来、地域の交流の場としての活用など様々なことが出来、便利で集客することにも役立っているのではないだろうか。そうすることでリピーターも多くなり、道の駅でしか買えない商品を販売することで売上も伸びていると思われる。ETC利用の高速道からの一時退出を可能とする「賢い料金」高速道路以外の休憩施設へ一時退出でき休憩施設等の不足解消のためのもので、そして高速道に帰っていけるシステムだが、話を伺うと、時間制限があり一時間だけとのことで、少し時間には不安に思えた。都城市の道の駅も今後、建て替えなどする場合を含め、今後の道の駅の在り方についても、観光客を含め市民の集客と市・地域の活性化やの為には必要なもので周南市のような取り組みも参考にしながら、検討すべきではないか。

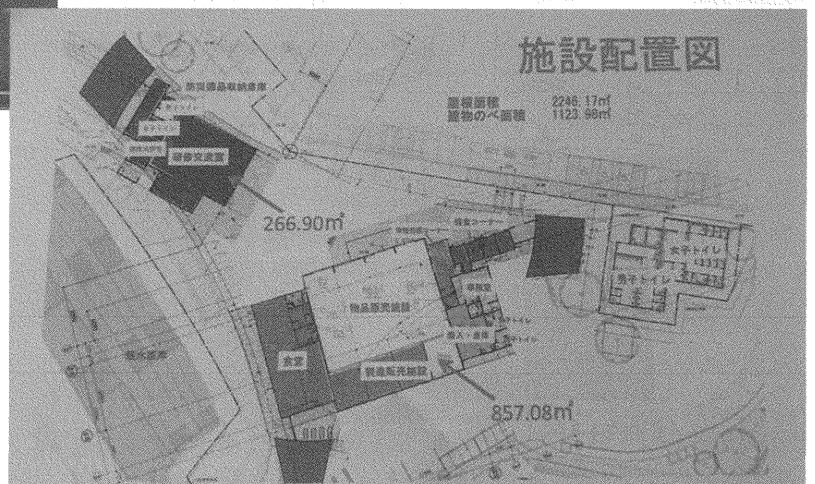


駐車場から見た風景 (左が店側・右は研修室)

上空写真



施設案内図



視察先 山口県下関市

1. 視察感想

「ジビエ有効活用推進事業について」視察感想

農作物などの被害を軽減するため、捕獲したイノシシや二ホンジカを有効活用することを目的として、下関北部中山間地域に有効活用拠点施設「みのりの丘ジビエセンター」を建設された。ジビエとは捕獲された野生鳥獣の肉のことであり、秋ごろが旬であり脂肪が少なく栄養価も高く、森のごちそうとして注目されている。ジビエセンターは有害鳥獣の解体施設として使われ、指定管理で運営されている。また、隣接する長門市との事業連携している。

平成 21 年度から、山口大学農学部や保健所等で E 型肝炎ウイルス感染調査の取り組みがなされ、処理衛生管理ガイドラインを策定し地元猟友会、地元自治会や河川漁業協同組合の方々と建設予定地の説明会などを実施、E 型肝炎ウイルス感染調査では平成 21 年～平成 23 年にイノシシ 113 頭、シカ 115 頭を検査、結果イノシシは E 型肝炎ウイルスを保有、シカはイノシシに比べ感染率が低いことが分かったため、必ず加熱処理を行う事となった。センターまでもってくる時間は、捕獲してから一時間以内となっており、そのため建設場所は中山間地域となっている。

販路拡大するため市内の飲食店や食肉販売店にアンケート調査を実施（配布数 230 店、回答数 107 店、回収率 46.52%）約 1/4 の関心があった。

また試食会ではイノシシ 8 種類、シカ 7 種類の商品を試食していただいた。イノシシ肉はソーセージやハムなどがあり、シカ肉はソーセージとハンバーグが人気だったとのことでした。加工品として 12 品あり販売されている。平成 28 年度の捕獲頭数イノシシは 1,140 頭、シカ 1,316 頭とのことで毎年これぐらいで推移しているようです。

2. 視察の成果及び市政への反映等

サル被害について、伺ったがサルについては、大きな捕獲柵を導入し補助額一基あたり 157,000 円とのこと、サルは埋めるとのことで、平成 28 年度は 120 頭で、今までの約 2 倍近い捕獲数だったとのことで、農業者にとっては農作物への被害が少なくなり大変助かっているとのこと。

都城市においても、中山間地域における農作物の被害が多く、農家の方々の高齢化、また、猟友会のメンバーも高齢化していることでもあり、早急に検討すべきであるし、有害鳥獣の有効活用するためにも対応が望まれる。